『彼岸から　水波の隔て　神の旅』四角な関係vol.5

くまがいマキ

ー舞台中央に、小卓と椅子。小卓の上には、湯飲みと急須。女が椅子に座っている。女は時代を感じさせない洋装。母親然とはしていないが、子供がいてもおかしくない風体である。現実的な空間ではないが、椅子や湯飲みなどには生活感が欲しい。モノローグ・ドラマなので、以下の台詞は全て女が喋る。湯飲みを持つタイミングと置くタイミングは指定箇所以外では自由である。飲むタイミングは、基本的に飲める箇所の中で、最適と判断される箇所で、自由である。

ごめんなさい。あなたに対する初めての手紙が遺書だなんて。（笑う）おかしいわね、こんな母親。まだ七年しか生きていない子供に、こんな改まった口調で、しかも、ぬけぬけと遺書だなんて。

ー急須のお茶を湯飲みに注ぐ。

あなたがこれを読むのは今から十年後の筈。（まぶしそうに、笑う）十七歳のあなた。想像できないわ。

ーお茶を飲む。

私は今まで、うまく生きてきたと思います。死ぬことも、そう、多分、うまくできると思います。誰も私が自殺したなんて思わないでしょう。…気がかりなのは、あなただけ。

真相なんて、本当のところは私自身にもわからないけれど、あなたは真相に一番近い所を見る目を、持っているような気がするの。ただ、そのままのことを見る目を。でも、私が何も伝えようとしなければ、あなたがこれから見ることになるのは、私の死体だけ。何も言わない死体だけ。

もし私があなただったら、怒り狂うと思うわ。だってそれは、人生っていう勝負に必要なカードが、ごっそり抜き取

られているようなものですもの。カードが配られると同時にふせられ、永遠に見ることができなくなる。そのカードを使っていいものかどうか、判断もできない。そんなルールで始められた勝負、私だったら許さない。

ー湯飲みを手に取るが、飲まずに置く。

私が今から見せようとしているカードは、一枚を除いて、全部負け札よ。見せない方がいいのかもしれないと何度も思ったわ。知らない方が幸せだと、多くの人が言うでしょう。その人達に反論する気はありません。だってそれは真実ですもの。でも、私は、伝えたいと思ってしまった。だから、何があったかを全て書くつもりです。

ー湯飲みを手に取り、お茶を飲む。

これも、賭け。

ー湯飲みを置く。

私が最初に子供を身籠ったのは、十七の時でした。まだ恋もしていない。好きな男の手も握ったことがない時でした。

私の父は大学病院の医局長で、彼には息子がいませんでした。母は、私と妹を産むと身体を壊し、毎日決まった量の薬を飲むことで、やっと生きていられるという状態になり、次の子を産むのは不可能でした。

父は自分の研究を自分の息子に継がせたかった為、男が生まれなかったことをひどく悔しがりました。けれど、いないものはしょうがありません。婿養子に継がせることに決めました。つまり、私の夫です。

私の人生は父の研究を継ぐ男と結婚することと早くから決まっていました。その決定が覆されたのは、皮肉にも、父の信念と強引さが原因で引き起こされた、ある事件によってでした。

婚約者と初めて会ったのは十六の時でした。その人は大学を出たばかりでしたが、父が認めた人ですから当然優秀な

人でした。二回、会って話したでしょうか。彼は、父の専門の腎臓移植のこと、そして自分の夢である人工心臓のことを話しました。

私は少なからず医学に興味を持っていましたが、彼の話は専門的過ぎてわかりませんでした。父が鷹揚に頷いているところをみると、最新の論文もよく研究しているようでした。父は横暴でしたが、それを支えるだけの自信も持っていました。不勉強さを最も嫌い、間違った知識をひけらかす輩には、どんな立場の人間だろうが、正しさを見せつけずにはおれないような性格でした。

ある日私は、父が忘れていった資料を病院に届けに行きました。広い病院で父を探していると、白衣の男が私を呼び止めました。先生なら向こうの病棟でお待ちです。とても丁寧な口調だったのを覚えています。案内されたのは手術室でした。いきなり顔を押さえつけられ、叫ぼうとした私の口の中に強い薬の臭いが充満しました。暴れようとする私の身体を物凄い力で押さえ込み、必死でもがく私の目に、男の真剣な顔が見えました。

目が覚めると、病院の個室のベッドに私は寝ていました。そばで母が押し殺した声で泣いています。起き上がろうとしましたが、まるで力が入りません。自分の身体ではないような感じでした。ぼんやりと、死んでしまったのではないだろうかと思いました。

父が入ってきました。苦い表情で私を見ると、目をそらしました。その目の動きで、私は生きているのだとわかりました。では、私は一体、どうしてしまったのでしょう。

父は母に麻酔が覚めた後の処置を伝えると、すぐに出て行きました。

白衣の男は製薬会社の人間でした。製薬会社と病院というのは、例えて言えば、水道と蛇口のような関係です。どんなにいい薬を作ろうが、医者が蛇口を開かない限り、薬は患者の手元に届きません。逆に言えば、大したことのない薬でも、医者が蛇口を開きさえすれば、薬は患者の手元に届くのです。

こうした関係の中で、お金が動くのは当たり前のことです。父はお金を貰うのを当然のこととしていました。しかも、医学的な正しさに関しては、自分の考えが絶対だという強固な信念も持っていました。あの白衣の男には、それらのことが父の中ではちっとも矛盾しないのだということが、わからなかったのだと思います。父は男からお金を貰いましたが、男の持ってきた薬には、蛇口を開きませんでした。会社を首になった男は、父の未来を壊そうと、娘を強姦しました。

ーお茶を飲む。

私の未来は、すぐには変わりませんでした。

手術室の私を最初に発見したのは、婚約者でした。彼の的確な判断のお陰で、私のことは外部に漏れずに済みました。彼は私に何が起きたのかを知りながら、婚約を破棄しませんでした。出世のためではなかったようです。それは、彼の中にあるヒューマニズムのようなものが理由でした。部屋で寝ている私を訪れる彼は、病気の回復を願う医者のようでした。麻酔をかけられていた私は、彼の目に、怪我を負った患者のように映ったのかもしれません。危急の際に私情を挟まず処置をした冷静さといい、人を救いたいと願う純粋な気持ちといい、彼は本当に外科医にうってつけの人間でした。

子供を身籠ったのがわかったのは、妊娠三ヶ月目でした。事件の二週間後に、不整月経のようなものがあったため、発見が遅れたのです。その頃の私に、自分の身体に関する正確な知識があれば、もしかしたら、もう少し早くわかっていたかもしれないのですが、私は何も知りませんでした。二日程で終わってしまったそれを、私は母に月経として報告しました。母は父に報告し、事件は終わったものと、関係者全員が了解しました。ところが、次の月の月経が来ません。しばらく待ってみましたがやはり来ないので、母に相談しました。真っ青になった母は父に報告し、父は真っ赤になって怒りながら、友人の産婦人科医に電話をしました。翌日、すぐ入院。手術が行われました。しばらくだるい日が続きましたが、私はすぐに健康を取り戻しました。ところが、先生から検査の必要があると言われ、私は再び病院に行くことになりました。そして、検査の結果、父と母も呼ばれ、話がありました。

「困ったことに、子供はRhの陽性だったようだ」と先生は言いました。父はびくりとしたように私を見ると、「抗体があるのか？」と先生に聞きました。「ああ。血液反応がある」「手術は何週目だった？」「多分八週目だ。もう心臓は動いていたから」

母はおろおろと父と先生の顔を見比べ、はっきりとした意味はわからないまでも、忌まわしい何かが起きていることを感じとっているようでした。

私の血液はRhの陰性で、父も同じ血液型でした。陰性の人は陽性の人から血液をもらうと血液が固まってしまうの

で、陰性の人からしか輸血は出来ないということは知っていました。その血液凝固が母親と赤ん坊の間で起きるのが、母子血液型不適合という症状で、私の身体の中で、それが起きているというのです。

私は何も感じませんでした。全てのことが私の頭の上を通り過ぎて行くような感じで、私は常に、何事かが起きている渦の外にいるような気分でした。話の中心に据えられているのは、いつも私なのに。

「普通、初めての子供だけは産むように勧めるんだけどね」先生が誰にともなく、ぼそっとつぶやきました。父も母も苦しそうな顔をしました。私は、〝普通〟の反対の言葉は何だろう？と、ぼんやり考えていました。

「もう子供は出来ないんでしょうか？」母の言葉は痛ましいものでした。よりによって、母がその質問をするなんて。

「既に抗体がありますから、二人目の方がより危険です。もちろん、子供も陰性の場合は、何の問題もありませんが」

父は押し黙ったまま何も言いません。「相手の方が陰性の場合は、大丈夫なんですか？」尚も母はたずねます。「え、陰性同士の場合、子供は必ず陰性ですから」「陽性の場合は？」「父親が陽性の場合、両方の可能性があります」両方の可能性。その時の私には、何かいいことのように、その言葉が響きました。

婚約は破棄されました。決めたのは父です。婚約者に、何と言ったのかは知りません。

母の話を聞きながら、私は突然、自分の役目が終わったことに気が付きました。私の人生は、お葬式の菊の数まで決まっているものだと思い込んでいたのが、いきなり白紙になったのです。私が今まで目にしたことのない自由が、行く手に広がっていました。

母は尚も「陰性の人は少ないけれど、きっといい人がいるから」と、くどくどしく言っていましたが、私は何も聞いていませんでした。これは、チャンスだ。自分の好きにできる、最後のチャンスかもしれない。私は迷いませんでした。与えられたチャンスを逃さずに、母に向かって言い放ちました。

「私は一生、子供は産みません」

父は、「好きなようにさせろ」と言ったそうです。

ーお茶を飲む。

私の人生からは出産も結婚も消えてなくなりましたが、恋はすることに決めました。尼寺に入るには、私の好奇心は

旺盛過ぎたのです。目の前に広がる自由にくらくらしました。もっと自分の身体のことを知りたい。今まで必要ないと切り捨てられていた全ての事を知りたい。私にはそれが出来る。そして、私は私の好きなものを選び取ることが、許されている。私は生まれて初めて、自分で息をしていることを感じました。

図書館の司書の職を得て、私は一人暮らしを始めました。そして、男という不思議な生き物のことを少しずつ学んでいきました。

変な生き物。小さくて、弱々しくて、みっともない。そして、それゆえに愛らしい。私は何も望んでいませんでしたから、惜しみなく与えることが出来ました。男は決して私の中に入ってくることはなく、いつも通り過ぎて行きました。

あの人に初めて会ったのは、図書館でした。面白そうな本を読んでいるな、と思い、後を追うように、彼の借りていく本を読んでみました。宇宙や、猿や、時間や、恐竜。DNA、伝説、ヒトの身体の本。小説は一冊もありませんでした。脈絡が無いように見えた本が、一つの筋道に則って選ばれているのだということが朧にわかった頃、私は彼と話してみたいと思うようになりました。

話してみて、変わった人だと思いました。異常ということではありません。ひどくまともで、だけど、普通ではない。普通の反対が何なのかよくわからないまま、私は彼と付き合うようになりました。

ある時、彼の様子がどうもおかしいので、どうしたのかと聞いてみると「妹が死んだ」と言いました。私はその時まで、彼に妹がいることも知りませんでした。彼も私も、あまり自分のことを話さず、相手に聞くことも、あまりなかったからです。可哀想に、と私は思いました。なんだか彼まで死にそうに見えたからです。

「君は、死にたいと思ったことある？」唐突に彼は聞きました。死にたい？ そんなこと考えたこともありません。私は首を横に振りました。長い沈黙がありました。「あなたは死にたいの？」私が聞くと、彼は首を振り、「死にたくない」と言いました。泣いているような笑っているような顔を見て、私はまた、可哀想、と思いました。

彼は精神科の医者でした。優秀な医者らしく、彼を訪ねて、遠くからも人が集まってくるようでした。「何であんな本ばかり、借りていたの？」と聞いたことがあります。彼は、「人間の感情や心理ばっかり見ているから、そういうものが全く無いものを読みたくなるんだよ」と答えました。それは正直な答でしたが、私には、もっと別な答が隠されているように思えました。

しばらくして、彼からプロポースがありました。私は結婚する気はありませんでした。それまでにも、二回、他の人からプロポーズされたことがありましたが、いずれも適当な口実を作って断りました。本当のことを言って断るより、嘘をついた方が問題は少ないと思ったからです。

でも、彼に嘘をつきたくはありませんでした。下手な嘘がつける相手ではありませんし、何より、それは彼に失礼だと思ったからです。

私は子供を産まない決意をした経緯を、彼に話しました。彼は精神科医のような目で、何も言わず、私の話を聞きました。そして、聞き終わると、おもむろに自分の話を始めました。

彼の母親は、彼の妹を産むとすぐ、狂ってしまったそうです。原因は幾つも考えられ、それらが積み重なっての結果だったようです。彼の父は事業の失敗と看病の疲れから自殺を図り、幼い妹と病気の母の面倒を、彼は一人で負わなければならなくなりました。

「高校の時母が死んでくれて、正直ホッとしたよ。妹はもうすぐ中学に入るし、自分の進路をどうしようかと、悩んでいた時だったからね」そう言いながら、彼はにっこり笑いました。その笑顔を見て、私は初めて、この人が好きなんだと、心の底から思いました。

「精神科を志したのは、母を救いたかったからだと思うんだ。でも不思議なもので、病気のことを知れば知るほど、救えなかったんだということがわかってくるね」

「どうして？」

「遺伝も、環境も、状況も、人の力ではどうしようもないんだよ。できるのはせいぜい、事実の見方を変えること位で」

彼が読んでいた本のことを思い出しました。あれらは、人の限界のことを書いていた本だということが、急にわかりました。そのことを彼に言うと、彼は笑いながら、「ああ、そうだね。ああいう本を読んで、少しずつ、諦めをつけていったのかもしれないな」と言いました。

罪を憎んで人を憎まず。彼はきっと、人間の残酷さの前に、弱さを見て取ってしまって、傷つきながらも許す以外に選択の道がない、そういう生き方をしてきたのだろうと思いました。だから私は、可哀想だと思ったのでしょう。

「僕はずっと、人の可能性を信じてきた。きっと、自分の中にある可能性を信じたかったんだろうね。でも、君に会っ

て、可能性なんてなくてもいいや、と思ったよ」
「どういうこと？」
彼は私の質問には答えず、こう言いました。
「多分、僕も君も、可哀想なんだよ。でも、可哀想なまま、死んでもいいんじゃないかな」
「それ、私と死にたいってこと？」
私の言葉に彼は笑い、首を振りました。
「君と一緒に生きたいってことだよ」
それで、私達は結婚することに決めました。

ーお茶を飲む。

私達の結婚は、台所とお風呂とトイレを共有する一人暮らしのようなものでした。ですが、寝食を共にするということは不思議なもので、お互いの呼吸が次第に合わさり、同じ器官を共有して呼吸しているような錯覚をもたらすものでした。私たちは二人でいることも一人でいることも好きでした。一緒に生きるというのは、そういうことなのだろうかと、私は思いました。
思いがけない幸福に慣れる頃、私は何故、子供を産まないのか、自問自答するようになりました。一生産まないという決意は、何のためのものだったのだろう？ 父が決めたレールが外された今、産まない自由と同時に、産む自由も私は持っているのではないか？ それなら何故、産む自由を選ばないのだろう？
両方の可能性。あの時の先生の言葉が蘇りました。「父親が陰性の場合、両方の可能性があります」
私は、彼と自分の違いのことを考えました。彼の血液には、生まれつき、D抗原があります。私には生まれつきそれがありません。ところが、あの白衣の男によってもたらされた子供は、D抗原を持っていました。私の身体はそれを拒否し、D抗原を殺すための、抗体を作ってしまいました。もし、彼の血液が私の身体に注ぎ込まれれば、私の中にある抗体はたちまち反応し、彼の血液のD抗原を殺していくでしょう。それは死体となって私の血液を満たし、血液の流れを止めてしまいます。

彼の子供を私が宿した場合、可能性は二つあります。私と同じようにD抗原を持たない子供ならば、私の抗体は何もしません。だって、反応するものが何もないのですから。

もし、彼と同じようにD抗原を持った子供ならば、私が既に持っている抗体がへその緒を通じて子供の身体に流れ込み、D抗原を攻撃します。へその緒を断ち切るわけにはいきません。それは、子供にとっては唯一の、生きる源なのですから。

私が彼に似た子供を産むということは、血液が澱みきり、酸素を送れなくなるのが先か、子供が生まれるのが先か、命を賭けたレースのようなものなのです。

赤血球の破壊。黄疸。脳障害。死亡。

医学書を読む私は、あるくだりで思わず笑ってしまいました。そこには、「子供が陰性になるか陽性になるかは、現代の医学では予測することはできない」と書かれてあったからです。

自由というのは一体何でしょう。

私は彼と別れることに決めました。彼の反対を予測していた私は、説得する材料を必死で考え、事に臨みました。ところが、案に相違し、私が別れようと言うと、彼は理由も聞かず、あっさりと頷きました。

簡単な手続きで結婚した二人は、簡単な手続きで離婚しました。それぞれの持ち物が、それぞれの新しい家に運び込まれると、全てが終わってしまいました。あまりのあっけなさに呆然としてしまった程です。

生活は変わらずに続いているのに、何かが失われてしまったような気がしました。

二人はあまりにもきちんと別れたので、もう一度会う口実すらありませんでした。会いたいという気持ちは、理由ではありません。それは欲望です。もう一度会った時、それがはっきりしました。多分二人共、それがわかっていたのでしょう。離婚するまでそれがわからなかったのではありません。知っていたけれど、認めたくなかったのです。

「自分の血が怖くなったんだよ」と彼は言いました。寂しいことです。

「私も」と私が言うと、話は全て終わりました。

欲望が二人を結び付けているのです。甘えたい。許されたい。守られたい。叱られたい。それはまるで母親への欲望です。私だけを見ていて欲しい。私だけを愛して欲しい。いつまでも。無条件に。

可能性なんてどうだっていいと思いました。彼が健康な人と結婚する可能性。私が陰性の人と結婚する可能性。二人

の子供が健康に生まれる可能性。気狂いに生まれる可能性。片輪に生まれる可能性。子供も私も死ぬ可能性。可能性は無限です。私は彼に、飽きられ、嫌われ、厭わしく思われるかもしれません。でもそれが何だっていうんです。それは全て、可能性でしかありません。

私達は予測することを止めました。子供を産むことも産まないことも出来る。だったら、本当に欲しくなるまで、可能性を考えるのは止めよう。そう決めました。

ーお茶を飲む。湯飲みは手に持ったまま。

子供を産むというのは、親になるということです。私たちの最大のためらいは、そこにあったのだと思います。子供は可愛いもの。親は愛情深いもの。私達は、私達の経験上、それを素直に信じることは出来ませんでした。

私達は決定を先送りにしました。何かを抱えることが出来るようになるまで待とう。まだ、時間はあるのだから。

ー湯飲みを置く。

電話が鳴りました。聞いたこともない病院からです。事故があったというのです。まだ命はあるが、いつ死んでもおかしくない状態だ。早く来て欲しい。電話の声はそう言いました。またです。また、私は渦の外に放り出されたのです。

病院に行くと、集中治療室に案内されました。受付で待っていると、せかせかした足取りで医者が現れました。看護師の合図で私に近づいて来ると、「奥さんですか？」と聞きました。私はそれに頷きました。

私は離婚した後、もう一度籍を入れ直すのを嫌がりました。子供を産むことを決めてから結婚したいと望んだからです。彼はそれに反対しました。結婚は自分達のものじゃない、僕達のことを知らない人達のためのものだ、と。賢明な判断だったと思います。

医者は私を説明室に連れて行き、彼の状態を説明し始めました。

「ご主人は、交通事故で頭を打ったようです。奇跡的に外傷はほとんどないんですが、脳の部分、具体的には脳幹とい

う部分がかなりのダメージを受けています。ここに運ばれて来た時には呼吸がかなり弱っていましたので、すぐに集中治療室に運び込み、人工呼吸器等、様々な治療を試みました」

私は医者の口から彼の死が出てくるのを覚悟していました。いや、待っていたと言ってもいいでしょう。ところが意外にも、医者は、絶望的な症状を語りながらも、何か情熱的な、まるで希望を語るような口調だったのです。何がどうなっているのだかよくわかりませんでしたが、彼がまだ生きているのだということはわかりました。「まだ生きているのなら、お願いです。会わせて下さい」私がそう言うと、医者は首を横に振りました。非常に危険な状態なので、外からの雑菌は極力抑えなければならない、今は無理だと言うのです。

雑菌。医者は自分がどんなにひどいことを言っているのか、気付いていないようでした。

私は待ちました。何も考えず、待ちました。全ての可能性を頭の中から追い出して、ひたすら、時間が何かを告げてくれるのを待っていました。

一昼夜が過ぎ、別の医者が現れました。その沈痛な顔を見て、私は全てを諦めました。ところがその医者は奇妙な話を始めたのです。

患者の瞳孔は開き、脳波は全く見られない。しかし、心臓は動き、人工呼吸器の助けを借りて、呼吸は続いているというのです。彼の身体に顕れた全く異なる二つの状態に、私は混乱しました。脳死という言葉、概念は知っていました。ですが、そのことが引き起こす状況は、想像だにしていませんでした。それはまるで、バラバラの何かがまとまりのないまま、強引に結び付けられている、そんな感じのものでした。

感情がどこを探しても見つかりません。何に、どう反応していいのか、さっぱりわからないのです。医者は私に治療を続けるかどうか訊ねました。治療？一体何を治療するんだろう？雲をつかむような疑問だけが、頭の中を舞っています。何も答えない私に、医者は尚も訊ねます。この状態から助かる見込みはまずないが、治療を続けることには意味がある、と。

この医者は治療を続けたがっているらしい。そのことは、なんとなくわかりました。では、私は？私は一体、どうしたいんだろう？

その時頭に浮かんだのは、彼の顔でした。どうしたい？そんなこと考えるまでもありません。私は彼に、会いたいのです。

「彼に会わせて下さい」医者の眼に、ちらりと軽蔑のようなものが浮かんだのは、気のせいでしょうか。
更衣室で青い滅菌帽をかぶり、滅菌衣を着て、紙マスクをかけました。看護師に案内されて集中治療室に入ると、そこは、機械のかすかなうなり声、消毒薬の臭い、そして人工的な照明に閉ざされた空間でした。「あちらです」指された方向に歩み寄る私に「機械やチューブには触らないで下さいね」と、看護師は注意を促しました。
そこには確かに、彼がいました。しかし、私は彼を見て、ますます混乱しました。そこに横たわっている彼は、なんと言ったらいいのでしょう、確かに彼なのですが、何か、彼によく似た、別のもののように見えるのです。
彼を取り巻く機械やチューブのせいだけではありません。何かが、よくわからない何かが、失われているのです。私は私に理解出来る何かを探そうと、じっと彼を見つめました。すると、ふっと、父の病院で見た末期癌の患者のことを思い出しました。痩せ衰え、ほとんど身動き出来ず、死臭に近い臭いを漂わせながらも、それは確かに、生きている人である何かを持っていました。
彼には、それがないのです。何故それが感じられないんだろう。私は焦りました。面会の時間は十分と決められています。その間に、私は何かをつかまなければならないのです。その何かをつかまずに、自分がどうしたいのかなんて、どうやって決めればいいのでしょう。
時間がじりじりと過ぎて行きました。人の命の重さが、ゆっくりと私にのしかかってきます。笑っていた彼。死にたくないと言っていた彼。何が違うんだろう。あの時と何が違うんだろう。息をしているけれど、動かない。脈打つ心臓は、感情に左右されず、乱れない。あまりにも整然としていて、きれい過ぎる。
欲望の欠如。あの癌患者との違いは、欲望という、人間特有の、煩悩の欠如にあったのだ。そう思い当たりました。それでは、欲望のないこの彼は、人間ではないのだろうか？ 自分の考えにゾッとしました。こんなに簡単に判断を下していいものだろうか。私は何かに、騙されているのではないだろうか。
時間がギュゥッと、凝縮されました。私はその時、何かの崖っぷちに立たされていたのだと思います。
それは、ほんの偶然の出来事でした。側で押し黙っていた看護師が、「あら」と言って、彼の額にかかっていたチューブを邪魔にならないようにどけたのです。その時、何かが見えました。近づいてよく見ると、それは小さな傷でした。「これ」と私が指さすと「ああ、事故の時ついた傷でしょう」と、看護師は言いました。
その小さなかすり傷は、かさぶたになっていました。

涙が溢れてきました。一昼夜の間、彼の身体は生き続けてきたのです。医者の手に全てを委ねているように見えながらも、必死で、彼の身体自体が、生き続けようと闘っていたのです。流れ出る血液を凝固させ、白血球はバイ菌と闘い、その死骸が、かさぶたをつくる。欲望がないなんて嘘です。身体はこんなにも正直です。可哀想なまま死んでもいいと彼は言いました。それは、死にたいということではありません。全く、全く反対の事でした。

私は集中治療室を出ました。

ーお茶を飲む。湯飲みは持ったまま。

彼はそれからひと月の間その部屋にいました。そのひと月の間に起こった事は、幾分、喜劇的な出来事でした。

ー湯飲みを置く。

治療を続けることを決めた次の日、担当の医者の態度が急に変わりました。父から電話があったそうです。その医者は父の教え子でした。何か不都合な点があったら何でも言ってくれと言うのです。前の日に、私が面会時間の変更を申し入れたことを、彼は忘れてしまったのでしょうか。確か前の日は、規則だから変えられないと言った筈です。

面会時間は午前と午後に一回ずつありましたが、普通に働いている者にとっては、なんとも中途半端な時間帯のものでした。私の仕事場と病院はかなり離れていたため、わずか十分の面会時間のために、半日以上も費やさなければいけませんでした。私は職場の人に事情を話して、とりあえず、一週間仕事を休ませてもらうことに決めたばかりでした。面会時間のことを言ってみると、気まずそうに、事情を考慮して、例外的に、うんぬん、かんぬん、ということでした。

最初の一週間私は、近くのホテルに部屋をとり、面会時間以外も病院に詰めていました。病院からホテルに戻ると、彼の叔母と名乗る女性が私を待っていました。私は疲れが出始めた頃でしたので、何の愛想もない対応だったのだと思います。彼女は気後れした様子で私が何も聞かないうちから、言い訳のようなものを話し出しました。それは人を嫌な気持ちにさせる話でした。その女性は、彼の父の妹で、彼の父が死ぬ前、死ぬ時、死んだ後、それぞれに対して無力な

人でした。今また、彼が死に接している時、彼女に出来る事は何もありませんでしたし、彼女の心のバランスのために、彼の死を提供する気は、私にはありませんでした。

私は疲れきった顔で、こう切り出してみました。「ご心配いただいてありがとうございます。今彼は、集中治療室という所で、最先端の医療を受けております。幸い、技術の進歩のお陰で、まだ生き永らえております。少しでも長く生きて欲しいと思っています。ただ、お薬も非常に高価なもので、たった一日の治療費が、十万円位になるらしくって…」私がそこで言葉を途切らすと、彼女の腰がわずかばかり浮いたのが感じられました。私は続けました。「でも私、借金をしてでも、彼の寿命が終わるまで、出来るだけのことをしてあげたいんです」自分の方に来た視線をきっぱり避けて、彼女は言葉を濁し始めました。

私も何かと忙しいし、主人の仕事も大変だし、今日はこの辺で失礼した方が。私は心底疲れきった顔で、彼女の連絡先を聞きました。悪魔に追いかけられているように、彼女は激しくかぶりを振ると、いえ、いえ、こちらからまた連絡しますから、と、逃げるように帰って行きました。

彼女の後ろ姿を見送りながら、罪悪感はかけらもありませんでした。ただ、彼女の時代遅れのスーツや、張り込んだであろうバッグ、くたびれた靴等が頭に貼りついて、嫌な気分になりました。

実際、集中治療室での治療費は莫大なものでした。これを一体誰が支払うのか。考えられる選択肢は五つありました。一つ目は、彼をはねた車に掛けられている自動車損害賠償責任保険、いわゆる自賠責保険からの支払い。二つ目は、加害者の賠償による支払い。三つ目は、労災保険からの支払い。四つ目は、健康保険からの支払い。五つ目は、自己負担、つまり貯金をおろして実費を払っていくものでした。

その日彼は、遠方の患者の診療に行っていました。通院が不可能になった患者への、いわば出張診療でした。そして、家へ帰る途中、事故にあったのです。

その時タクシーの運転手は、上から何か落ちてくるのを見たそうです。それは人の靴でした。上を見ると、歩道橋から自分の車めがけて飛び下りてくる人の姿が見えました。運転手はとっさにハンドルを切ったそうです。

飛び下りた男は、サラ金に追われていたそうです。多額の生命保険を自分に掛け、一年が過ぎるのを待って、自殺しようとしました。男は、びっこを引きずりながら現場を離れ、自宅で首を吊っていたそうです。

保険会社の人間が、タクシー会社の代理で、示談を申し込みました。治療費を自賠責保険から支払うと言うのです。

私はそれを受けました。
治療費は一週間で限度額に達しました。示談の内容が障害による治療に限られ、死亡時までの治療や、死亡による利益の損失、慰謝料の請求等が含まれていなかったからです。治療費が限度額を超える場合、健康保険か労災保険からの支払いが認められます。労災の適応は難しいという事だったので、結局、健康保険からの支払いをすることにしました。
後でわかった事ですが、労災の適応が認められなかったのは、彼が帰宅途中にコーヒーを飲んだ為でした。
法律とは解釈です。はっきりと線引きをし、有効な範囲を決めているように見えて、その実、ひどくあいまいで、その場その場の人間が決めていくしかない、個別の事例の重なり合う、部分でしかないのです。
労災は、勤務中、あるいは通勤中の事故に対する、労働者への保障です。彼の場合そのための条件は揃っていました。ただ、帰りに一杯のコーヒーを飲んだ事が問題だったのです。
一杯のコーヒーは、場合によっては、通勤中に通常行うような、〝ささいな行為〟と認められます。缶コーヒーの購入や、喉の渇きを癒す為だけの行為であるならば。
そこでは時間が客観的な事柄のように扱われます。〝ほんのちょっと〟というのは、一体、どの位の長さなのでしょう。
精神科医の労働は、時間で計れない種類のものです。効果や効率を考えて治療を行うというより、とりあえずマイナスにはならない事柄を選択していく、ある意味、原始的で、行き当たりばったりなものなのです。
精神科医に最も必要なのはバランス感覚です。急ぎ過ぎてもいけないし、遅過ぎてもいけない。その微妙な頃合いを言葉で説明することは困難です。患者との接し方も、バランスです。近寄らなければいけないけれど、深入りし過ぎてもいけない。下手をすると引きずられ、共倒れになってしまうからです。
患者に会った後の休憩の事を、彼は〝自分を取り戻す時間〟と呼んでいました。診療中の自分というのは、自分であって自分でない、ニュートラルな存在であることが一番望ましいからです。
その日、彼はきっと引きずられたのでしょう。一時間ばかり、喫茶店にいたそうです。疲れた顔でコーヒーも飲まず、ただボーッと、音楽を聞いていたそうです。
一週間が過ぎようとする頃、私は強い無力感に苛まれていました。何もすることがないのです。毎日午前と午後に一

度ずつ、十分間面会をする以外、私が出来る事は何もありませんでした。面会。それはひどい苦痛でした。一日の大半を面会時間を待つことに費やしながら、待ち望んでいた面会は、いつも同じ失望の繰り返しでした。変わらない顔。変わらない身体。あのかさぶただけが、私の何かを励ましてくれましたが、それも少しずつ消え、かすかな痕を残すだけになってしまいました。喜ぶべきことだとわかっていても、かさぶたの消失は生きていることの証拠までも消し去ってしまったように、私には感じられました。

七日目のことです。いつものように失望だけを味わう事を覚悟して、でも、ほんのわずかの希望を抑えることが出来ずに、面会の時間が来ました。新しく見る看護師が私を迎えました。私の顔を真っ直ぐ見ると、堰を切ったように話し出しました。彼の著作を読んだこと。その本が自分が看護師になるきっかけになったこと。入院しているのを知って悲しんだこと。自分が世話をすることが出来るようになってうれしいこと。彼女の顔に表れる人間的な表情を見て、私は特権というものをかみしめました。彼はこの看護師に愛されている。まるで、まだ生きている人間であるかのように。他の看護師が彼を物のように扱っていたわけではありません。それなりに敬意を払って接していたと思います。ですが、患者は患者です。重たい肉のかたまりです。それは、労働の対象でしかないのです。私は看護師という職業を尊敬しています。看護師は労多く益少ない労働を、多くの場合、非常な忍耐力と実際的な技術で黙々とこなしています。しかも驚くべきことに、笑顔を忘れることなく。自宅で病人を看護した事のある人ならば、看護師の偉大さはすぐわかる筈です。そして、その偉大さは、患者を労働の対象として見る事で、かろうじて保たれる種類のものなのです。

私は彼女にお願いしてみました。何でもいい、彼の世話をさせて欲しいと。彼女はしばらく考え込み、ゆっくりと、医者に掛け合って見ると、約束してくれました。

脳死状態の患者にどれ程の手が掛けられているか、その内容を知ったものは、寝たきりの老人との類似を指摘するでしょう。治療としての側面は、人工呼吸器や、輸血、抗生物質、栄養剤などの点滴と、重体の患者の様相を示します。モニターは患者の体温、脈拍、呼吸、血圧、意識状態などを常に記録し、異常はすぐに合図されます。こうしたハイテクの陰に、下の世話などの、より人間的な看護が隠されています。患者の口の中は乾燥しやすく、唾液の分泌が少ないため、綿棒で歯や、歯茎、口の中や舌などを掃除します。汗をかき、皮膚の代謝が常に行われている身体はきれいに拭く必要があります。頭もアルコールで洗髪します。目や耳、鼻も汚れやすいので、オイル棒などで清潔にします。寝たきりの身体は床ずれが出来るので、二〜三時間おきに体位を変えます。またその時に、マッサージや指圧をして筋肉を

ほぐし、足、膝、もも、肩の関節を運動させます。点滴などの針が刺さっている部分はよく観察し、正しく入っているか、皮膚が赤くなっていないか、チェックをします。そして、排尿、排便の始末をします。

私は体位を変える際に行うマッサージを手伝わせてもらえることになりました。医者は当然渋りましたが、彼女が「何かあったら私が責任を取ります」と、押し切ってくれたのです。彼女とペアを組んでいるもう一人の看護師は、最初、口には出しませんが、明らかに私を嫌っていました。医者の娘がコネにものを言わせて、自分達の領分に入り込み、偽善的な行為をしていると思ったのでしょう。私がそれ程足手まといでもなく、汚いことも嫌がらず、あまり注文も言わない事がわかると、少しずつ好意を示してくれるようになりました。

ある日職場に父が訪ねて来ました。私は昼間働いて、夜面会に行く生活を始めたばかりでした。面会後、夕食を共にする約束をしました。

食事が終わると、父は単刀直入に切り出しました。彼の腎臓と肝臓と心臓を提供してくれないかと言うのです。彼の脳死を知った時から、私はこの申し出が来る事を覚悟していました。ただ、その事を父が人任せにせず、わざわざ出向いて自分の口から言った事が、何だか意外な気がする位でした。私が一日考えさせて欲しいと言うと、父はそれ以上何も言わず、コーヒーのお替りを注文しました。

その時、父が命に関する何か、説教臭い事を言っていたら、私は即座にその場で断っていたでしょう。私だって、人工透析を受ける腎臓病患者の辛さは知っています。移植を受けた中年の男性が、おしっこが出たと言って、涙を流して喜ぶ姿を見ています。それ以上何も言わなかったのは、私の気持ちを見越しての作戦ではなく、父の精一杯の優しさだったのだと思います。私は少しずつ父の事がわかってきました。父は根っからの医者なのです。判断の基準は、損か得か、役に立つか立たないか、この二つしかないのです。それ以上の事は考えても仕方のない事だと切り捨てる。それは、一種の美学なのだと思います。父の美徳も醜さも、全ては、その単純さにありました。

ーお茶を飲む。

彼が事故にあった翌日から、病院には多くの人が見舞いに訪れました。面会が家族だけに限られている事がわかると、家に、遠慮がちな、心のこもったお見舞いの品や手紙が届くようになりました。彼の同僚や同業者からは、カンパ

のお金や花などが。一番実際的で、すぐ役立つものを送ってくれたのは、患者の家族でした。入院している彼に必要なものではなく、彼に付き添う私に必要なもの。それぞれの体験からのアドバイス。看護につきまとうストレスを発散させる楽しいものなど。私が一人きりで彼の死に向き合わなくてもいいように、ユーモアを交えて、励ましてくれました。

患者から送られてくる手紙は非常にストレートなものでした。彼らは日常的に自分の中にある不安と向き合っています。そして、その不安は大概、死と結びついています。普通に生活している人間が、死を考える事が、一体、何度あるでしょう。精神科の患者は毎日、何かの形で自分の死に接しているのです。

結婚したての頃、彼はこう言っていました。「彼らは何かが欠落しているんじゃない。多分、死に対しての反応が過剰なんだ。だから、医者がすべきなのは、大丈夫、そんなに一生懸命にならなくてもちゃんと生きていけるよ、って事を、身をもって示してあげる事だと思うんだ」

彼の後任の医者や家族にとって、彼の状態を患者に告げるかどうかは、きわどい選択だったと思います。その事実を乗り越えてくれれば、これに優る治療はないでしょう。しかし、彼と自分を重ね合わせている患者にとっては、彼の死は、自分の死です。

私は後任になったそれぞれの医者と相談し、患者へのお礼状を書きました。彼だったら何と言ったか、どうすれば、少しでもプラスの方に、物事が見えるようになるのか、出来るだけ簡潔に、丁寧に返事を書きました。

ある患者が自殺をしました。その患者の家族と医者は、彼の入院を隠すことに決めたのですが、何かに勘づいたその患者は、彼の入院する病院を探し当て、事実を知ってしまったのです。ひどく癖のある患者で、彼もその癖を飲み込むまで、ひどく苦労していました。その患者にとって彼が死ぬということは、この世界から、自分の唯一の理解者が消え去ってしまった事だと感じられたのでしょう。

ー女、立ち上がる。

私は、彼が死んで、悲しいのでしょうか？ 父からの申し出があった後、私は、自分のことを考えてみました。矢継ぎ早に押し寄せる事柄に対応するのに追われ、そんな事、考える暇もありませんでした。もしかしたら、悲しみなん

て、お葬式が終わり、四十九日が終わってやっと、静かに湧いてくるようなものなのかもしれません。私がここで何を選んでも、その悲しみからは逃れられません。だったら、何を判断の基準にすればよいのでしょう。

私は考えるのを止め、外に出て、歩いてみることにしました。

ー女、ゆっくり、舞台を円を描くように歩く。

目的地はありませんでした。ただ、足の向くままに歩いていると、水が低い方に流れるように、川縁にたどり着きました。

ー女、ゆっくりしゃがむ。風の音。

何も考えず、水が流れるのを眺めていました。

ー間。

神と仏は水波の隔て、という言葉があります。神様というのは、仏様が、人々を救う為にこの世に現れた仮の姿で、もともとは同じもの。水と、波が、もともとは同じもので、その形、状態の違いに過ぎないのと同じであるという意味です。

ー間。風の音、少し強くなる。

神に三熱の苦しみあり、という言葉があります。貧しさに振り回される人間。怒りに惑わされる人間。知識の無さにあがく人間。そこから生まれる様々な災い。神はそれを見てどうしてやることも出来ず、苦しむのだそうです。神は仏と違い、そこから人間をすくい上げてやることは、出来ないのです。

ー間。風の音、強くなる。

自然は、それ程美しいものではありません。どちらかと言えば、醜く、恐ろしいものです。命が美しいというのは嘘です。命は、ある瞬間、光輝くもので、始終美しいわけではありません。

ー間。

夕方になり、暗くなってきたので、私は帰りました。

ー女、立ち上がり、ゆっくり、舞台を円を描くように歩き、椅子に座る。風の音消える。

翌日、父が訪ねて来ました。私は臓器の提供を承諾すると告げました。そして、言葉を続けました。「ただし、交換条件があります。彼の子供を産むことに、協力して下さい」

父はしばらく沈黙したままでした。

「この提案を実行するためには、色々問題があることは承知の上です。でも、あなたなら、その問題を克服することが可能な筈です」と私が続けると、父はやっと口を開きました。「後悔しないか？」私は頷きました。

父は「わかった」と言うと、臓器提供の同意書を出しました。私は提供者の欄に、彼の名前ではなく、自分の名前を書き入れました。父はそれを見ると、困ったような顔をしました。「必要な臓器は、私のものでもいい筈です。幸い私はまだ生きているので、臓器の状態もいい筈ですし、Rhマイナスの提供者は、貴重だと思います」

父はしばらく、何かを見つめるように視線を宙に浮かすと、同意書を破きました。「それなら、この用紙ではない」「どうすればいいんですか？」と私が聞くと、「それならば、改めて、献体をお願いしたい」と言いました。死後の遺体の提供です。私は同意し、契約は成立しました。

ー間。

神様は私の決定に、嘆き苦しんでいるでしょうか。私は何が起きるのか、この目で見てみたかったのです。

ーお茶を飲む。

私の通院が始まりました。同じ病院の産婦人科です。まず、私自身の検査が行われました。血液検査だけでなく、様々な検査を行ったところ、卵管に異常があることがわかりました。排卵しても、卵管に異常があると、受精卵は子宮に着床しません。通り道が塞がれているからです。子供をつくらないと決めて、私達は避妊していました。そんな必要は全くなかったのです。

残された方法は、体外受精でした。

脳死状態の夫から精子を採取し、卵管のつまった妻の卵巣を排卵誘発剤で刺激し、卵子を採取し、卵子に細い穴を開け、シャーレの中で精子と混ぜ合わせて受精させ、受精卵の分割が進行し始めたところで、子宮内に戻し、着床を待つ。無事に着床すれば、後は、普通の妊娠と同じです。

でも、これ程人工的に統御された妊娠が、本当に普通の妊娠と同じなのでしょうか？

自然な状態ならば、ほとんどの精子は受精しません。卵子にたどり着く前にそのほとんどが死んでしまい、たどり着いても勢いがなければ卵子に侵入することは出来ないからです。運良く受精しても、形がいびつだったり、弱かったりする受精卵は、自然に流産してしまいます。自然とはそういうものです。妊娠に気付く前に、どれ程の数の精子と卵子が無駄になっていることか。気の遠くなるような数です。

体外受精の技術は、精子と卵子を無駄なく、効率よく受精させるために開発されたものです。全ての精子に可能性を。全ての卵子に可能性を。障害を取り除き、育ち易い環境を造ってやる。それは、もともと持っている生きる力を、底上げしてあげるようなものです。その底がいつの日か、抜けないという保証はありません。

私は実はこの時、あなたに殺されたかったのです。どうしても死にたくて、でも、どうしても死ねない状況で、考えられる一番いい死に方が、彼の子供、あなたに殺されることだったのです。

もし彼が生きていたら、私達は子供をつくらなかったような気がします。二人共が諦められる年齢まで待って、自分達の子供は葬り去って、もしかしたら、養子をもらったかもしれません。三代さかのぼれば、どんな家系にも異常者はいると言います。ですが、特殊な血というのは、明らかに存在するのです。

人間という種全体を考えれば、様々な人間がいて、多様であればある程、種としては豊かで、どんな状況にも対応出来る柔軟さを持つものだと解釈されます。氷河期にマンモスは死に絶えて、何故、これ程までに条件の違う広い地域に人間は生活出来るのか。結果から言えば、多様性のお陰です。でも、人間は自分の多様性の事など、最近まで、ちっとも知りませんでした。そのことにどんな意味があるのかを考えて、生きてきたわけではありません。生きていたいから、死にたくないから、生きてきただけです。

貧しさを克服して、怒りを克服して、無知を克服して、生きたいと望みました。それは身にかかる火の粉を振り払うように、自然な行為でした。

そうした積み重ねの結果、私達は、動物の領域を大きく踏み越えてしまいました。貧しさや、病気や、死を避けるだけでなく、より豊かに、より健康に、より長生きを望むようになりました。欲望を抑えるストッパーが外れてしまったのです。

いいえ、もともとストッパーなどというものは存在していなかったのかもしれません。ただ、他の生き物との競合によって、バランスが保たれていただけなのでしょう。

私は、人間が神の領域に入り込んだのだ、などと、馬鹿なことを言う気はありません。私達は、人間という、迷宮の領域に入り込んだのです。より豊かに、より健康に、より長生きを望むようになって、私達は、より幸福になったでしょうか？ 渇きを癒すための水ならば、渇きが癒えれば満足しますが、欲望を満足させる水は、この世に存在しません。

脳死という状態も、人工授精という状態も、人間が造り出したものです。自然なものならば、まだ諦めもつくけれど、人の手で、何かが可能だと一度わかれば、諦めの悪い、欲望をたぎらせた人間が増えていくことでしょう。

ーお茶を飲む。湯飲みを持ったまま。

魔物とは、人間が産み出したものです。人間の頭の中にもともとあって、それが外に顕れた形です。歪んだ恐怖と欲望が、産みの親です。純粋な恐怖は、死にたくないという気持ちから作られます。純粋な欲望は、生きていたいという気持ちから作られます。今私達は、生と死を、どのように捉えているのでしょう？ それが本当に大切なものだと捉えることは、可能なのでしょうか？

ー湯飲みを置く。

受精卵を子宮に戻す日に、私は彼の人工呼吸器を止めました。賭けは一度きりと決めていたからです。
彼の担当の医者は、治療の続行を望みました。私の担当の医者は、精子と卵子の凍結を望みました。私は、これ以上医者の実験に付き合うのには、うんざりしていましたし、再度の賭けは、ルール違反だと考えていました。賽は私の手にありました。

ー女、上に向けて広げた手の平を、ゆっくり伏せ、そのまま手を、自分のお腹に持っていく。

私は自分が何をしているのか、本当のところはよくわかっていなかったのだと思います。先のことは何も考えていませんでした。自分が死ぬかどうか、決めるのを先に延ばした、そんなふうに考えていました。
初めの兆候は、尿検査による診断でした。妊娠反応プラス、と記入された検査表を見せられて、「無事着床したようですね」と医者に言われました。なんの実感もありません。「流産の危険があるから、大事をとって下さいね」と言われても、なんの不安もありませんでした。
私はその時の自分の気持ちを表す言葉を持っていません。RHプラスの子供が自分を殺してくれるのを望んでいるのか、それとも、無事健康な子供を産んで、幸せな生活を二人で始めたいと望んでいるのか。賭けの結果はまだ出ていません。何かの結果を待ち望んでいるのでもなく、恐れているのでもなく、私はただ、生きていました。
夢を見ました。病院のベッドに私は寝ています。白衣の男が私の上に乗っています。男の白いお尻が見えました。ネジを回し過ぎた人形のように男の腰が上下しています。ひどく滑稽です。気が付くと男は私になっていました。ベッド

に横になっているのは、チューブで固定された彼です。私は彼のペニスに付けられた尿管を外すと、ペニスをゆっくり自分の中に入れました。ひどく、哀れだと思いました。

目が覚めて、ゆっくり深呼吸をしました。許してやらなければいけないと思いました。みっともなく生き続けている肉体を。

血液検査の結果、抗体価が上がっていることがわかりました。医者は慎重に言葉を選んでいます。まだ子供がRhプラスだと決まったわけではない。妊娠初期に身体のバランスが崩れるのは、よくあることだ。子供の血液型が正確にわかるまで、もう少し様子を見よう。もし子供がRhプラスでも、今は血清があるから大丈夫だ、と。

次の日の朝、軽い吐き気で目が覚めました。水を飲み、りんごを食べると、すぐにおさまりました。身体が異物感を訴えているのです。胎盤が出来て安定するまで、私の身体は、子供を闖入者だと見做すのでしょう。

抗体は少しずつ増えていきました。最悪の事態はとうの昔に覚悟しています。私は、子供の血液型を知りたいとも思っていませんでした。

最初の胎動は奇妙な感じのものでした。なんだかお腹の中がむずむずするような、食べ過ぎて横になった時に、腸がキュルキュル動くような。とても人間の動きとは思えません。「小さな魚が動いているみたいでしょう」という看護師さんの言葉がぴったりでした。

いよいよ胎児の血液を検査する日になりました。へその緒の静脈に細い針を通して採血するため、胎児が安定する時期を待たないと、流産の危険が大きいのです。

もし、このまま流産してしまったら、そう思って、ギクリとしました。流産するのは嫌だと思っている自分に気が付いたからです。あの時の奇妙な変化を、私は今も忘れません。子供もろとも死にたいと願っていた自分。子供の血液型なんてどっちでも構わないと思っていた自分。最終的な運命は自分が握っていると信じていた自分。

とんでもない思い上がりでした。私は、このお腹の中で魚のように動いているこの子を、殺したくないと願っている自分に気付いてしまったのです。身体中の血の気がひいていくような心持ちでした。

そして、子供の血液型がわかった時、私は初めて、はっきり悟りました。私はこの子を産みたかったのです。多分、ずっと。ずっと以前から。もしかしたら、彼と出会う以前から。ずっと産みたくて、でも、自分自身にもそのことが言い出せなくて、じっと黙っていた自分がいたことに、その時気が付きました。なんて、可哀想だったんでしょう。

彼の言葉を思い出しました。「多分、僕も君も、可哀想なんだよ」ああ、それは、こういう意味だったのか。本当に私達は、なんて可哀想だったんだろう。

ポロポロと涙をこぼし続ける私にお医者さんが、「Rhマイナスだったんだから、そんなに泣くことないよ」と言い、看護師さん達が、「よかったね」「よかったね」と繰り返し言ってくれました。

私は本格的に出産の準備を始めました。この子を産むまでは岩にかじりついてでも死にたくない。そう思っている自分がなんだか微笑ましく、力み過ぎて早産しないよう、肩の力を抜いて呼吸をする努力をしました。

陣痛も破水も怖くありませんでした。私が唯一恐れていたのは、赤ん坊の産声が聞こえてこないことでした。

力んでは呼吸をやわらげ、やわらげては、また力む。その繰り返しの果てに、突然、スポンとタガが外れたような感じがしました。小さな、はっきりとした泣き声。「女の子ですよ」と言いながら、私のお腹に乗せられたあなたは、とても小さくて、とても大きく見えました。しばらく泣いた後、目をぱっちり開け、気持ち良さそうな顔をして、私を見ています。「生まれて五分位が、赤ちゃん、一番気持ちがいいんですよ」とお医者さんが教えてくれました。脳の中に快楽性物質が放出されるのだそうです。陣痛時の母親にも、似たような物質が放出され、通常ならとても耐えられない痛みをやわらげてくれるのです。

授乳も不思議なシステムです。赤ん坊が乳首を吸うことによって、栄養価が高く、免疫性のある母乳が作られ、その相互作用が母親と子供を、ある安定した状態に導きます。新しい関係が作り上げられていくのが感じられました。

おむつを取り替え、お風呂に入れ、おっぱいをあげて、寝かしつける。子育てが大変でなかったと言うつもりはありません。ただ、あの集中治療室での日々に比べると。

脳死状態の彼を世話しながら、私は何度も同じ疑問を感じたものです。「こうしていることが、彼のためになるんだろうか？」疑問は今も宙に浮いたままです。

言葉を返してくれないという点では赤ちゃんも一緒です。しかし赤ん坊は、言葉より何より、全身が圧倒的なパワーで生きたいと訴えています。赤ん坊の最初の訴えは、「お腹が空いた」と「何だか不快だ」この二つに尽きるようです。それはひどく単純で人間的で、私の心を慰めてくれる要求でした。

あなたが一歳になると、私は職場に戻るために、あなたを保育園に預けることに決めました。母はそれに反対しました。あなたが可哀想だと言うのです。可哀想。なんて安易な言葉でしょう。哀れみなど、何の役にも立ちません。私も

生きていかねばならないし、あなたも生きていかなければならないのですから。
　初めて保育園に連れて行った日、あなたは泣きました。当然のことだと思います。でも、迎えに行く時には、すっかり周囲に溶け込んで、にこにこと保育士さんに抱かれていました。「こんなに馴染むのが早い子はめずらしいですよ」と言われ、私はあなたがとても誇らしかった。
　いつもにこにこして、手のかからない、いい子。それがあなたに対する保育士さんの共通の意見でした。「ただね、お気に入りのオモチャを横取りされたりすると、相手が自分より大きい男の子でも、猛然と取り返しに行ったりするんですよ」
　自分のつかみ取った権利を主張するあなたの勇姿を想像したら、私はなんだか晴々とした気分になり、「この子は大丈夫だ」と思いました。
　毎日毎日が、本当にあっという間に過ぎていきました。あなたは立ち上がり、歩くようになり、話すようになり、考えるようになりました。
　確か、三つの時だったと思います。私が何か理不尽なことであなたを叱ったことがありました。多分、仕事が忙しい時期で、つまらない苛立ちをつい、あなたにぶつけてしまったのでしょう。夕食の支度が整ってあなたを呼ぶと、返事がありません。襖を開けると、廊下の隅に座り込んで憮然としているあなたがいました。声をかけても返事をしません。そのうちにお腹が空くだろうとほっておくと、しばらくして、パタパタとあなたの足音が近づいて来ました。気が付かないふりをして食事を続けていると、襖がぱたんと閉まる音がしました。やっと来たなと思い、振り向くと、あなたの姿はありません。どうしたんだろうと襖を開けてみると、さっきと同じ廊下の隅に、同じ表情で座り込んでいるあなたがいました。私はなんだかおかしくなって、笑いながらあなたを呼びました。あなたは尚も返事をしません。仕方がないので、襖を開けたまま待っていると、またぱたぱたと足音が聞こえ、襖がぱたんと閉められました。
　何回それを繰り返したでしょうか。ふと、これはハンガーストライキなのではないかと思いました。どんなにおいしそうなお菓子を与えたところで、あなたはあなたの要求するものが得られなければ、和解する気はないのだということに気付きました。
　あなたの要求は簡単なものでした。私の心からの謝罪です。
「ごめんね。一緒にごはん食べよう」と私が言うと、あなたはやっと私の顔を見て、渋々といった様子で立ち上がりま

した。憮然とした表情を崩さないまま、ごはんを食べるあなたの姿がなんだかおかしくって、笑いながら、「おいしいね」と言うと、つられて笑いかけた顔を必死で引き締め、変な顔をしながら食べています。その姿を見て、私は、よかった、まだ子供だ、と思いました。

ーお茶を飲む。湯飲みを持ったまま。

母が死にました。ひっそりとした死でした。一度、妹が買い物に出ている間に、階段で倒れたことがありました。母の寝室は二階にあり、階下のトイレに行き、戻る途中で気を失ったのです。

とても我慢強い人でした。長年の病は彼女にとっては当たり前の事だったのかもしれません。わざわざ人に迷惑をかけたくないと言って、母は入院を拒否しました。結局、トイレに一番近い客室を母の寝室にする事で、自宅療養を続ける事にしました。

私は、常々考えていたことがありました。母は、あの父と結婚して、幸せだったのだろうかと。母のお葬式に来たのは、父の関係者ばかりでした。母には親しい友人がいなかったのです。それは、病のせいでもありましたが、それればかりが理由ではなかった筈です。父によって家に閉じ込められた可哀想な人。私は長年、母のことをそう思っていました。

ー湯飲みを置く。

死ぬ間際の母は子供のようでした。会う度に小さくなり、どんどん透き通っていくようでした。見舞いに来た私の手を握り、お手伝いさんにまかせっぱなしで、ちゃんと育てなくって御免なさい。と、涙を流しました。私は、母がそのことを後悔しているのを初めて知りました。そしてその時、母が、あなたを保育園に預けるのを可哀想だと言った意味がわかりました。

自分の出来なかった事を、母は私に望んでいたのです。ムシのいい望みですが、母を責める気持ちは起こりませんでした。自分の出来なかった事を子供に望んでしまう気持ちは、私にもよくわかります。何故なら、私自身、家の外であ

なたを育てたいと思ったその裏に、自分がこう育てられたかったという願望があった事に、薄々気付いていたからです。

どんなに子供の幸福を考えたところで、育てるという行為につきまとうエゴからは、逃れられないのかもしれません。その事を隠さずに意識した方が、まだしもマシなのでしょう。子供にも選択の自由があるのですから。

自分と子供は違う人間なのです。とても当たり前で、どうしようもない事実です。その事実を認めた上で培われた関係だけ、かろうじて、信頼出来るものになるのではないでしょうか。

母は何かを取ろうとして、半身を布団から出した姿で死んでいました。もし、入院していたら。もし、看護師さんを呼ぶことが出来たら。もし、ヘルパーさんに何でも頼むことが出来たら。母は、自分で何かを取る事を、諦めたでしょうか。

人間は自分の死に方を選ぶことは出来ません。人が出来るのは、どう生きるかを選ぶことだけです。その結果としての死に様が、他人にみじめで可哀想なものと映っても、それはやはりその人が、何かを選んだ結果なのだと思います。

母の死後、父は老け込んでいきました。外科手術は体力が衰えても出来るようなものではありません。あるミスをきっかけに父は引退を決めました。そのミスは致命的なものではありませんでしたが、完璧主義の父には耐えがたかったようです。

引退後は睡眠時間を惜しみ、何かと格闘するように膨大な量の原稿を書いていました。父の直接の死因は脳卒中でした。けれど、臓器のほとんどが使いものにならない状態で、何が原因で死んでもおかしくなかったという事です。私は、彼の死は、緩慢な自殺だったと思っています。

父が倒れた時その場にいたのは私一人でした。妹は結婚し、家を出ていました。私がたまたま立ち寄ったその日に、何故、父が倒れたのか。不思議でもあり、至極当然のことのような気もします。

あなたはその時、下の部屋でおやつを食べながら絵本を読んでいました。私はお茶を持って二階の父の書斎に行きました。

「もう少しで一段落するから、そこに置いておいてくれ」と父は言いました。私は何となく父の背中を眺め、それから、すぐに下に降りることなく、窓から色づいた銀杏を眺めていました。何かが、落ちるような音がしました。見ると、父が倒れています。その時、私は、ああ、なんだ、父が倒れたんだ。と思いました。もしかしたら、微笑んでさえ

いたかもしれません。
　大変だと思う気持ちと、なんだかのんびりした気分と、奇妙に分離した時間が流れました。「お父さん」と呼ぶ声が、自分のものではないような感じでした。こちらの方を向いている顔が少し歪み、何か言ったようでした。既に、顔からは血の気が引いています。視界に原稿用紙が入って来ました。父の署名が書かれてあります。いつも父は、原稿の最後に自分の名前を署名するのです。ああ、書き終わったんだと私は思いました。
　父に近寄り、手を握ると、かすかに握り返すような感じがありました。意思の力というより、反射のような弱々しいものでした。
　父の頭の下には数冊の本がありました。その本の角が痛そうで、私は側に座ると、父の頭を自分の膝に乗せました。歪んだ顔が、ゆっくりと吐き出される息とともに、静かな状態に向かいました。終わったのだということがわかりました。
　下に行って救急車を呼ぶまで、どれ位の間座っていたのかよくわかりません。多分、全てのことは数分の間に起こったのだと思います。

ーお茶を飲む。湯飲みを持ったまま。

　タマシヒという言葉があります。日本の古い言葉におけるタマとは生命のこと。ヒは、力を表します。つまり、魂（タマシヒ）とは、生命の力という意味です。

ー湯飲みを置く。

　生命の力が枯れていくのをとどめることは出来ません。人がこの世に生まれ、肉体を持ち、動き始めるというのは、同時に、終わりを持つということです。外界から取り込んだ食物を、酸素を燃やすことでエネルギーに変換する。産声を上げてから息をひきとるまで、常に呼吸を続ける身体。生きるというのはつまるところ、息をすることなのかもしれません。生命の力が枯れきって、ヒが消えてしまった後、おおもとの生命、タマがどこへいくのかそれはわかりませ

ん。ただ、地上に残された、肉体という形は、ゆっくりと変化し続け、土に埋められた微生物等のエサになり、新たな呼吸のもとになるのです。

救急車が来て、父が運ばれ、警察の事情聴取が行われました。倒れた時刻、朝からの状況、ここにいる理由等、いくつもの質問がなされました。死因がわかるまで、私は殺人の疑いをかけられても仕方がないのだということに、しばらくして気付きました。これで、父に多額の保険金でも掛けられていたら大変だと、心の中で思いました。

「夫婦は、いつ何時相手に殺されても文句は言えない」と、生前父はよく言っていました。私はその言葉の傲慢さに反発を感じていました。父からの一方的な断定に聞こえたからです。今はそれが、お互い様という意味なのだという事がわかります。

父の頭を自分の膝に乗せた時、そうすることが父の死期を早めるかもしれないということは意識していました。でも、私はそうしたかった。その時、父の命は私の手の中にあったのでしょう。その感触。それは、無力感でも万能感でもなく、命をわけあっているという感覚でした。たまたま今、父の命が私の手の中にある。しかし同時に、私の命もいつ何時、誰かの手の中におさめられる事になっても構わない。そんなような感覚でした。

人工呼吸器を外された彼には、その感触がありませんでした。ただ、無理矢理させられていた運動から解放されて、安堵している肉体がそこにありました。

父のお葬式は盛大なものでした。形ばかりの悲しみでなく、父の研究を惜しみ、父の死を心から悲しむ人が少なからずいた事に、私は少し驚きました。父には敵も多かったけれど、その分、味方に対しては裏表なく愛情を注ぎ、慕われていたようなのです。父を嫌っていた人も、父の研究に対しては一目置いているようでした。

父の一番の業績は、臓器移植に伴う拒否反応に関する研究でした。人間は、免疫システムによって外から侵入してくるウイルスやバイ菌と戦います。外敵の侵入を防ぎ、退治して、内部を守るのです。この時、何を外敵とし、何を内部とするかという認識が一番大事になります。攻撃目標を間違えれば、自分を破壊してしまう事になるからです。つまり、自分と自分でないものを見分ける事によって、自分を守るのです。臓器を移植する場合、移植された身体は、新しい臓器を、侵入者、敵だと思い込み、攻撃することがあります。それが拒否反応という形になるのです。

何故、自分を守ろうとするのか。攻撃しなければ守りきれない、脆さ、儚さ。簡単に崩れさる自分。精一杯、拒否することでしか保てない何かが、きっとあるのでしょう。

私は彼と出会うまで、自分のことを特別な人間だと思っていました。周りを突き放すことでしか保てない何かがあったのだと思います。彼と出会って初めて、自分が当たり前であり、尚かつ、自分でしかないのだと思えるようになりました。自分の特別さなど大したものではないのです。彼を通して、初めて世界を覗いたような気分でした。自分よりも大事なものがこの世にはある。その確信が、私の内部を開く力になりました。

「知れば知る程、救えなかったんだということがわかってくるね」と彼は言いました。彼が救いたかったのは、本当にお母さんだったのでしょうか？ 過去は取り戻せません。そんなことは初めからわかっています。わかっていて、じゃぁ、何を救いたかったんだろう？ 現実のお母さんではない筈です。では、何だったのか。今の私には、何となくわかります。お母さんのことが好きで、でも何も出来ず、無力だった自分。その時の自分を、救いたかったのではないでしょうか。大きくなって、力をつけて、賢くなれば、救える筈だ。そう思って努力を重ねて、その結果、可哀想だった自分に気付いてしまったのでしょう。

それは絶望でしょうか。私はそうは思いません。ただ、事実を認められるようになった、それだけのことだと思います。

彼は私と出会い、そのことが認められるようになったのでしょう。私の中にも彼と同質の、可哀想な子供がいたから。

私は何もわかっていませんでした。彼のことも、自分のことも、色々なことが。

悲しいことですが、人間は一度失わないと、それがどんなものだったのか、本当にはわからないのです。

私はお葬式の間、ほとんど泣きませんでした。父の死を悼む気持ちはあっても、正直、自業自得だと思う気持ちの方が強かったからです。親族で食事をしていた時のことです。お酒を飲んだ年配者が昔話を始めました。

父は一人っ子でした。当時にしては珍しいことです。その理由を私はその時まで知りませんでした。

「出てくる時は大変だったけど、逝く時はあっという間だね」と、その親戚は言いました。「大変って、何がです？」と私が聞くと、別の親戚が「知らないのかい、えらい難産だったんだよ。三日も出て来ないで」と言いました。「もう出るかもう出るかって、ずっと待ってたんだけど出ねえから、産婆さん、一遍帰っちゃったんだよ」どっと、座が沸きました。

「細い人だったから、途中でつっかえちゃったんだね」「ほら、あいつ、足がでかかったじゃない。小さい時、お腹の

中で踏ん張ってたんだろう、っていじめたら、本気で殴りかかってきやがって」
楽しげに笑う声をぼんやり聞きながら、全ての辻褄が合ったのを私は感じていました。
父はきっと、自分の産まれた時のことを知り、自分が母を殺したのだと思ったのでしょう。自分が生まれることがなければ、母も死ぬことはなかったのだと。もしかしたらそのことがきっかけで、医者になることを選んだのかもしれません。
私が何故、彼を好きになったのか。何故、彼を可哀想だと思ったのか。結局、全てが繋がっていたのです。
父と彼は出所を同じくする合わせ鏡のようなものだったのでしょう。父はその欠落感をはね返し、切り捨て、埋めることで癒そうとしました。彼はその穴を受け入れ、繋ぎ留め、生かすことで癒そうとしたのだと思います。可哀想なお母さんを救うことの出来なかった可哀想な自分。父はその無力さを打ち負かそうとして死にました。彼はその無力さを受け入れて死にました。どちらが幸福で、どちらが不幸なのか。私にはわかりません。
彼と出会うまで、私には悲しいことも寂しいこともつらいこともありませんでした。望むものが何もなかったからです。だから限界もありませんでした。彼に会って、途方もない望みを抱くようになり、生まれて初めて、生きるのが苦しいことだと知りました。そして、生まれて初めて、生きていて良かったと思いました。不幸は、幸福と共にあるのではないでしょうか。何故なら、満ち足りて初めて、自分の欠けていた部分に気付くのですから。
可哀想でなかった子供などいないのかもしれません。欠けたところのない人間などいないのですから。
父の遺体は病院に献体されました。未熟なインターンの腕をあげるために、自分の身体を切り刻ませる。それが父にとっての救いだったのでしょう。
あなたが五歳になった秋のことです。あなたはある朝急に、保育園には行かないと言い出しました。理由を聞くと、あなたはきっぱり、「保育園には自由がない」と言いました。
私はびっくりしてしまいました。誰かにいじめられたとか、何か、嫌なことをされたから、行きたくないと言ったのかと思ったからです。思わず笑いそうになった顔を私は引き締めました。真面目な顔を崩さないあなたの姿が目に入ったからです。もしかしたら、自由という言葉に相応しい何かがあなたの中にあるのかもしれない、そんな考えが私の頭をよぎりました。
私は、「どうして自由がないと思うの？」と聞いてみました。

「裸足で遊んでいると、危ないから靴を履きなさいって言われるし、お昼寝の時間が来ると、眠くない時でも皆一緒に寝なくちゃいけないから」と、あなたは真剣な顔で答えました。
それはとても微笑ましい、子供らしい答えでした。ですがその中に、束縛を嫌う、きっぱりした響きがあるのを私は感じました。もしかしたら、この子は本当に、自由という意味がわかって言っているのかもしれない、私はそう思いました。
「保育園に行かないで、どうするの？」更に私は聞いてみました。
「一人で遊んでる」と、あなたは答えました。
私はしばらく考えました。
「一人で遊んでいると、怖いこともいっぱいあるわよ。公園で知らないおじさんにさらわれるかもしれないし、おうちにいても、泥棒に入られるかもしれない。お母さんはいないし、誰も助けてくれないわよ」
あなたの顔をじっと見ながらそう言うと、あなたは私の顔をまっすぐ見て、「それでもいい」と言いました。
「一人きりで寂しいかもしれないわよ。それでもいいの？」と続けて聞くと、「いい」と、きっぱり答えました。
その自我の強さ。潔い美しさ。
あなたはまだ五歳でした。一人で何かを決めたり何かをしたりするには、早過ぎる年齢です。でも、一体、幾つがそれに相応しい年齢なのでしょう。自分で自分のことを決め、自分でそれを実行する。マイナスの要素も含み込み、自分の決めたことに責任を持つ。一体幾つになれば、それが許されるのでしょう。
私はあなたの自由を信じることにしました。その可能性に賭けてみることにしました。
手のかからない、いい子。そういうものへの反発が、私にその選択をさせたのかもしれません。いい子でしかなかった自分の少女時代。その空しさが、私にあなたの可能性を信じたいと思わせたのかもしれません。ですが、あなたの目には、そういうものを超えた、人を信じさせる力がありました。
あなたの登園拒否は一週間と一日続きました。昼間、近所の公園でどうやって遊んでいるのか、誰もいない家の中で、何をしているのか。あなたは何も語りませんでした。寂しくない筈はないだろうに、何もなかったように普段と同じようにしています。怖さに負けずに、にこにこと笑っています。
一日経ち、三日経ち、一週間が過ぎようとしても、あなたは保育園に行くとは言い出しませんでした。「今日は行

く？」と聞いても、首を振るばかりです。
あなたの話を職場の先輩にすると、一度、連れていらっしゃいよ、と彼女は言いました。本が好きな子なら、ここに連れて来て児童室で遊ばせていればいいじゃないか。と、同僚も言ってくれました。
「お母さんと一緒に図書館に行く？」と私が聞くと、あなたは、何も言わずにうなずきました。
人の少ない午前中の静かな時間、あなたはずっと一人で本を読んでいました。お昼になって休憩室で、持ってきたお弁当を二人で食べました。午後になって子供連れのお母さん達が増える中、あなたはずっと、一人で本を読んでいました。
夕方になり、二人で手を繋いで帰りました。その帰り道、あなたは、「明日、保育園に行く」と言いました。

ーお茶を飲み。湯飲みを持ったまま。

黄金のマントというお話があります。そのマントは素肌に身に着けている限り輝き続けます。けれども、黄金は重く、硬く、すぐに人間の肌は痛さに耐えきれなくなります。肌着を下に着け、痛みをやわらげようとする人もいます。裾を切って売ってしまう人もいます。その痛みに耐え抜いて、元の輝きを保ち続けられる人はいません。自由とは、この黄金のマントのようなものなのでしょう。

ー湯飲みを置く。

安全と引き換えに失われる自由。人間は一人きりで生きることは出来ず、全ては関係の中で生かされるものです。
けれど、私達は自由を望みます。その輝きにあこがれます。肌着を着け、靴を履き、色々なもので自分を守っても、それを脱ぎ捨てたいという欲望を持ち続けます。脱ぎ捨てることが出来れば、黄金のマントが再び輝き出すことを知っているからです。
私は初めの子供を身籠るまで、黄金のマントを持っていませんでした。婚約が破棄されて、初めて手にしたそれは、まぶしい位に光輝いていました。でも彼と出会い、私はそのマントを脱ぎ捨てました。痛みのためではありません。自

由よりも大切なものを、手に入れたいと望んでしまったからです。

ーお茶を飲む。湯飲みを持ったまま。

遠くの方で、かすかな風の音。

妹が子供を産み、近所に越して来ると、あなたは赤ちゃんの面倒をよく見て、お姉さん風を吹かせ始めました。もし、私が死んだら。妹はあなたを自分の家に迎えるような気がします。そのことが確信できると、私には未練は何一つなくなりました。

ー風の音、少し強くなる。女、湯飲みを置く。それから、湯飲みを見つめる。

ここに、ほんの少しお茶の入ったお湯飲みがあります。そうしたことは、あなたに、伝わるでしょうか？ 私がここにいること。湯飲みがそこにあること。

ー女、湯飲みを持ち、お茶を飲み干す。

飲んで、食べて、息をする。

ー強い風の音、やがて静かになる。

もしも、そういうことが伝えられたら、どんなにいいでしょう。

ー湯飲みを置く。

七五三の写真が出来上がって二人で見ている時、あなたは「きれいで良かったね」と言いました。私はその時ぼんやりと、これが最後の写真かもしれないなと考えていたから、「そうね」と、何気なく答えました。ゆっくりとあなたの言葉が頭の中に入って来た時、その意味にドキリとしました。あなたは写真を見ていました。自分の晴れ姿にはしゃいでいるのではないことはすぐにわかりました。どういう意味？今のはどういう意味？あなたは写真を見ていました。穏やかに。きれいな顔で。

あなたが見ている写真を見てみました。小さな女の子が振袖を着て笑っている。その横にはお母さんが並んで立ち、笑っている。

意味なんてないことがわかりました。それは本当に、その通りのことだったから。

私は本当にあなたが好き。

「本当だね、きれいで良かったね」と私が言うと、あなたはうれしそうに笑い、「みっちゃんと遊んで来るね」と言いながら、立ち上がり、駆け出しました。

その後ろ姿を見送りながら、私は、明日、と思いました。

ー女、立ち上がる。溶暗。波の音。

明かりがゆっくりつくと、空っぽの椅子と、そのままに置かれた湯飲みが見える。

＊初出は、日本劇作家協会編『優秀新人戯曲集1966』ブロンズ新社

本稿は、加筆改訂版（但し、医療現場の状況は、執筆時の1995年から大きく変化していますが、その箇所は、当時の状況のまま、改変はしていません）

【参考文献】

『生まれるー胎児成長の記録ー』レナート・ニルソン（講談社）
『結婚・遺伝・生命』児玉　浩憲（三省堂新書５）
『老化ーDNAのたくらみー』土居　洋文（岩波書店）
『受精の生物学』日本発生生物学会編（岩波書店）
『オスとメスー性の不思議ー』長谷川　真理子（講談社現代新書）
『生物と無生物の間ーウイルスの話ー』川喜田　愛郎（岩波新書）
『バイオエシックスの話』ホアン・マシア（南窓社）
『母と子の絆ーその出発点を探るー』宮本　健作（中公新書９９８）
『胎児の環境としての母体ー幼い命のためにー』新井　良（岩波新書）
『血液と輸血』ジャン・ムーレック（白水社文庫クセジュ）
『人工心臓に挑む』後藤　正治（中公新書）
『インフォームド・コンセントー医療現場における説明と同意ー』水野　肇（中公新書）
『シーラおばさんの妊娠と出産の本』シーラ・キッツインガー（農文協）
『いのちの器』高山　文彦（双葉社）
『本音で語る　脳死・移植』中山研一・福間誠之　共編（メディカ出版）
『脳死・臓器移植・がん告知ー死と医療の人類学ー』波平　恵美子（福武文庫）
『安楽死と尊厳死ー医療の中の生と死ー』保阪　正康（講談社現代新書）
『脳死の人ー生命学の視点からー』森岡　正博（東京書籍）
『「体外受精」日記ー不妊治療八年目の赤ちゃんー』大槻　浩子（主婦と生活社）
『体外受精ー基礎から臨床までー』鈴木　秋悦 編（メジカルビューー社）
『試験管の中の子どもたち』大田　静雄（三一書房）

『生殖革命ー問われる生命倫理ー』マリ＝アンジュ・ダドレール（中央公論社）
『生殖革命ー子供の新しい作り方ー』P・シンガー　D・ウェールズ（晃洋書房）
『試験管ベビー』W・ウォルターズ編（岩波書店）
『生命操作はどこまで許されるか』メアリー・ワーノック（協同出版）
『家族生活と法』法学入門1　米倉　明 編（有斐閣双書）
『事故と保険の法律相談』三省堂編修所 編（三省堂実用）
『日常生活の諸届と書式』（主婦の友社）
『通勤災害認定事例総覧』（財団法人労働法令協会）
『わかりやすい職場の法律事典』清水　洋二（有斐閣選書）
『育児休業　介護休業　制度運用の実務』萩原　勝（中央経済社）
『荘子ー古代中国の実存主義』福永　光司（中公新書）
『日本語に探る古代信仰』土橋　寛（中公新書）